

# 天地創造

「初めに、神が天と地を創造した。」(創世記1:1)

## 天地を創造された神

(1) 神は存在するすべてのものの第一原因(最初の源、創始者、創造者)であり、無限で、永遠、自存の存在として聖書に啓示されている。このことはさらに簡単に言えば、神が存在しなかった瞬間はなかったということである。「山々が生まれる前から、あなたが地と世界とを生み出す前から、まことに、とこしえからとこしえまで、あなたは神です」(詩90:2)とモーセが主張している通りである。つまり神は永遠に(いつまでも)、無限に(初めも終わりもなく)存在しているということである。神は天と地にある創造されたものすべてより先に、それらのものと無関係に存在しておられる(1テモ6:16注, ⇒コロ1:16)。

(2) 神は人格を持つ存在であり、「ご自身のかたちとして」(創1:27, ⇒1:26注)アダムとエバを創造された方として啓示されている。神はご自分に似せて(愛やそのほかの特性を反映して)男と女を創造されたので神と交わり神に 응답することができた(⇒創1:26注)。ここに神と人間がどのように一つとなって歩むことができるかが示されている。

(3) 神はまた道徳的存在で、すべてのものを罪のない良いものとして創造された方として啓示されている。創造の働きを終えたあと、神は造られたすべてのものを見て「それは非常に良かった」と言われた(創1:31)。アダムとエバは神のかたちに創造されたので罪がなかった(⇒創1:26注)。エバが誘惑に応じた時に罪は人間存在の中に入ってきた。サタンは蛇を用いてエバをそそのかし神の喜ばないことをさせようとした。それが誘惑だった。こうしてアダムとエバはともに神の命令を無視して神に逆らうほうを選んだ(創3:7, ⇒ロマ5:12, 黙12:9)。

## 創造の働き

(1) 神は「天と地」にあるすべてのものを創造された(創1:1, ⇒イザ40:28, 42:5; 45:18, マコ13:19; エペ3:9, コロ1:16, ヘブ1:2, 黙10:6)。「創造した」ということは(《へ》バーラー)は神にしかできない活動にだけ使われる。それはある時点より前には存在しなかったけれども神が命じられたときに存在したということの意味している(⇒創1:3注)。

(2) 神の創造されたものはかたちがなく、空しく、やみでおおわれていたと聖書は描写している(創1:2)。その当時、宇宙と世界には今日のような秩序がなかった。地には何もなく、いのちもなく、真っ暗だった。けれどもそのとき、神は光を創造された(創1:3-5)。神はさらに宇宙に整ったかたちを与えられた(創1:6-13)。それから地を生き物で満たされた(創1:20-28)。

(3) 神が天地創造で用いられた方法はみことばの力だった。聖書は「神は仰せられた」と繰り返し書いている(創1:3, 6, 9, 11, 14, 20, 24, 26)。言い換えると、神がみことばをもって存在させる前には天地はどんなかたちでも存在しなかったのである(⇒詩33:6, 9, 148:5, イザ48:13, ロマ4:17, ヘブ11:3)。

(4) 「三位一体」ということは(⇒マタ3:17注, マコ1:11注, 「神の属性」の項 p.1016)は父である神、子である神、聖霊である神が三人で一人であることを示している。一つである神の存在すべてが天地創造の役割を持たれたのである。

(a) 御子は神がすべてのものを創造されたときの強力な「ことば」だった。ヨハネの福音書の初めにはキリストが永遠の神のことばとして啓示されている(ヨハ1:1)。「すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない」(ヨハ1:3)。使徒パウロは、「万物は御子(キリスト)にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです」

(コロ1:16)と言っている。ヘブル人への手紙の著者は御子によって神は世界を造られたと強調している(ヘブ1:2)。

(b) 同じように聖霊も天地創造の動きに積極的役割を果たされた。聖霊は創造されたものの上を「舞いかけていた」、またはその臨在でおおって、神がみことばをもって創造の動きを行うためのそれを保存し備えておられたと描かれている。「霊」を表すヘブル語の「ルーアハ」は「風」とも「息」とも翻訳できる。ある詩篇の記者は「主のことばによって、天は造られた。天の万象もすべて、御口のいぶき(ルーアハ)によって」(詩33:6)と言っている。聖霊はまた、神がみことばをもって創造されたものを維持することにもかわり続けておられる(ヨブ33:4, 詩104:30)。

### 天地創造の目的と目標

神は世界を創造するに当たって特別な理由を持っておられた。

(1) 神はご自分の栄光と美しさ、尊厳、力を目に見えるかたちで現すために天と地を創造された。ダビデは、「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる」(詩19:1, ⇒詩8:1)と言っている。創造された宇宙の全体を調べるなら(宇宙の巨大な広がりや各部分から自然の美しさや秩序に至るまで)、私たちは創造者である神を恐れ驚かすにはいられない。

(2) 神は栄光と名誉を受けるために天と地とを創造された。自然界の構成分子はみな神の創造の力を示している。太陽と月、岩と木々、雨と雪、川と流れ、丘と山、動物と鳥類は、それらを創造された神に対してその栄誉をたたえる存在である(詩98:7-8, 148:1-10, イザ55:12)。けれども神はそれらのものよりも人間から栄光と賛美を受けることを望み期待しておられる。

(3) 神は人類に対するご自分の目的と目標を成就する場所として地を創造された。

(a) 神は愛情に満ちた人格的關係を永遠に持つことができるように、アダムとエバをご自分のかたちに似せて創造された(⇒創1:26注)。人間を三位一体、つまり三面性(肉体とたましいと霊)を持つ存在として設計された。ある人はたましいは人間の知性と情性と自由意志を持つ部分であると描写している。その部分で私たちは信仰と愛と忠誠と感謝の心から神を礼拝し神に仕えることができる。霊は死のかなたまで存在し続ける神から与えられたその人の真実の部分である。私たちのこの部分は天国か地獄かのどちらかで永遠に生きていく。けれどもたましいと霊ということばはしばしば同じ意味に使われている(⇒「人間性」の項 p.1100)。

(b) 神は人間との親密な關係を持ち続けることを望まれた。そこで罪の結果(神に逆らって選択したことの結果)から人類を贖う(神との正しい關係に回復する、または買い戻す)ために救い主を送るという約束をされた(⇒創3:15注)。このようにして、神は人々が神との交わりを楽しみ神を尊び、最初に計画されたように正しく聖い生活を行うようにと願われたのである(イザ60:21, 61:1-3, エペ1:11-12, 1ペテ2:9)。

(c) 神の天地創造の究極の目的、または最終的成就は黙示録に記録されている。そこで使徒ヨハネは歴史の終りを「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて」(黙21:3)と描写している。

### 天地創造と進化論

現代の多くの科学的、教育的分野では、生命と宇宙の起源に関する見解としては進化論が支配的になっている。そこで聖書を信じるキリスト者は進化論について次の四つの見解を考慮に入れるべきである。

(1) 進化論は宇宙の起源と発達を説明しようとする自然主義的努力(超自然的活動を含まない)の結果である。この見解は世界を設計した人格を持つ神聖な創造者が存在しないことを想定している。進化論者はすべてのものは何億年にわたって起こった一連の偶然の出来事によって存在したと信じている。そして進化論の支持者たちは、自分たちの仮説を支持する科学的証拠があると主張する。

(2) 進化論の教えは本当は科学的ではない。科学的方式によれば結論はみな疑問の余地のない(否定できない)証拠に基づかなければならない。つまり、個人的な考えや議論では否定できない証拠が必要である。

その証拠は何回も何回も繰返され、重複されても同じ結果を生み出す実験から出たものでなければならない。けれども現在の世界の始まりに関する「ビッグバン」のような仮説を試し証明する実験はできない。また生物が最も単純なものから最も複雑な形態に至るまで徐々に発達したということを証明することもできない(この点は物質は変化するとき高次元ではなく、無秩序になる傾向を持つという熱力学の第二の法則と相容れない)。進化論は科学的「証拠」のない仮説である。仮説とはよく説明されている考えで、証明され調査できる事実を探して、さらなる研究に導くものである。科学の世界では仮説は何かを事実として提供する証拠とはなりえない。進化論を受入れるには実は人間の理論に対する信仰が求められるのである。それと対照的に、神の民は靈感され時間を経て試されてきた神の**ことば**を信じている。神の**ことば**は神こそが無からすべてのものを造られた方であることを明らかにしている(ヘブ11:3)。

(3) 様々な種(生物の分類上の基礎単位、属の下位にある関連したグループ)の内部で変化や発達が行われることは否定できない。たとえば、ある種は消滅する。実際にある種はもはや全く存在しない。一方、私たちは時に新しい発達または変化を見ることがある。けれども昔ある種の生物が別の種類の生物から発生したという理論を支持する証拠は地質学的にも化石の記録にも存在しない。むしろ、現存する証拠は神がすべての生き物をその「種類にしたがって」創造されたという聖書の宣言を支持しているのである(創1:21, 24-25)。

(4) 聖書を信じるキリスト者は、「有神論的進化論」と呼ばれる理論をも拒否しなければならない。この理論は、最初の生きた細胞が神の介入なしに今日の様々な植物や動物の種に発達したと信じる自然主義的進化論の結論を大部分受入れている。違うのは進化の過程を神が始められたと付け加えた点だけである。キリスト者として問題とするのは、このような理論は神がただ進化の過程を始めただけではなく、創造のあらゆる面で活動的役割を果たしたとする聖書の啓示と矛盾していることである。たとえば創世記1章にある主要な動詞の主語は全部神である(ただし、創1:12-これは1:11にある神の命令の成就を示す-と、「夕があり、朝があった」という繰返される聖句は別である)。したがって神は進化の過程に関与していないとか、何もしないで監督をするだけだったというような教えと聖書は無関係である。神はすべてのものに積極的に

かかわった創造者なのである(⇒コロ1:16)。

この聖書で、神はすべてのものを造られた方であることを明らかにしている(ヘブ11:3)。神はすべてのものに積極的にかかわった創造者なのである(⇒コロ1:16)。